

東原遺跡の平安時代集落の構造 — 実年代軸の設定と集団表象論の試み —

保 坂 康 夫

はじめに	4 住居址群の出現画期と分布
1 方法	5 集団表象分析の対象としてのカマド属性と墨書
2 時間軸としての甲斐型甕口縁部の継続的変化	土器
3 実年代への変換	6 東原遺跡の平安時代集落の構造

はじめに

山梨県下の平安時代集落の研究についてはいくつかの論功があり問題点が整理されている（注1）。しかし、集落内部の構造に論及したものは少なく、各報告書のまとめのなかでふれられることが多い（注2）。そこでは、甲斐型土器などの編年論に従い住居址出土の土器を分類し、カマドやその周辺出土の大型個体を基準に住居址の時期を決定し、同一時期とされた住居址の分布状況から集落の構造が叙述される場合が多い。カマドやその周辺出土の大型個体は、住居址の廃絶段階の時期を主に示していると考えられ、住居址の構築から廃絶までの存続期間を把握するには別の視点での分析が必要である。絶対年代により住居址の存続期間が表示できるならば、真の意味での同時存在の住居址群が把握でき、集落構造が把握できたことになる。また、真の意味での同時存在の住居址が把握できたとして、それぞれの住居址に居住する人間集団の社会的関係が把握されないと、真の集落構造は見えてこない。たとえば、ひとつの家族がひとつの集落を構成しているのか、複数の家族が構成するのかといった問題が興味がもたれるところである。こうした設問に解答を出し得る方法論についてのひとつの試みを行なうのが本論の目的である。

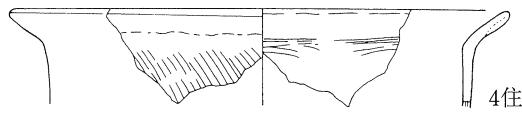
前者の問題に対しては、土器の持つ継続的変化属性に着目する。後者の問題については、カマドの型式と墨書土器に着目し、その属性のなかから集団表象を示すと思われるものを抽出して時期変化属性、継承属性、単一時期出現属性などに分類し、この内後二者を血縁的集団（家族を含む）を示す属性として提示し、集落の形成初期から終末まで集団表象を継承する継続的居住集団とある時期のみ集落に現われる遊動集団の2つの集団の存在を導き出す。

ここでは分析材料として八ヶ岳南麓の北巨摩郡大泉村東原遺跡（注3）を取り上げたい。

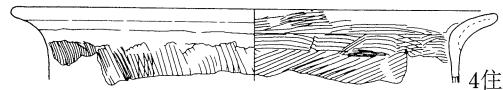
1 方法

集落論にとって必要な論議は、厳密な意味での同時存在をどのように把握するかという点である。各住居址から出土する土器は、覆土中のさまざまなレベルに分散分布する比較的小片の土器片と、床面やカマド内から出土する大型破片や完形個体とに分けられる。大抵の場合、後者によってその住居址の帰属時期とするが、それはその住居址の廃絶段階を示すものであり、どの時期からその住居址での居住を開始したか、どの時期にその住居址が構築されたかを示すものではない場合が多い。居住開始段階を示すであろう土器群は、廃絶段階より当然古い特長を持つものになるはずである。その土器を探すとすると覆土中の土器群をまず対象とせざるをえない。ここではまず、覆土中の土器が居住開始段階を示すものかどうかを検討する。

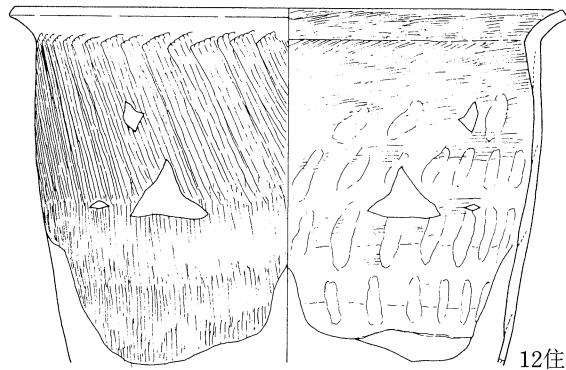
その際、時期区分をどのように行なっていくかが問題となる。平安時代土器は特に甲斐型土器の編年と年代



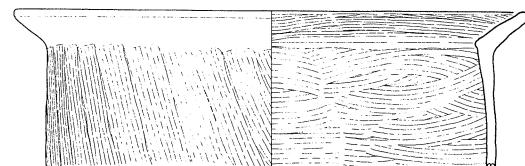
第Ⅰ期群



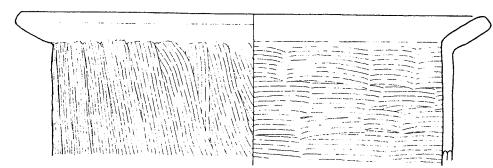
4住



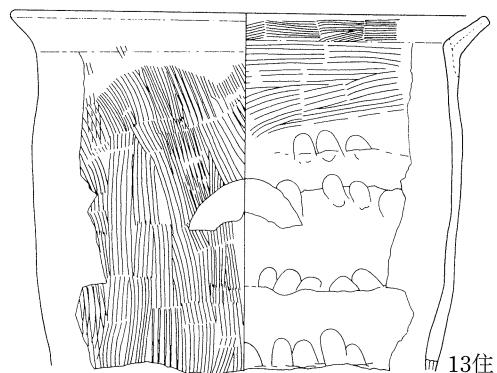
12住



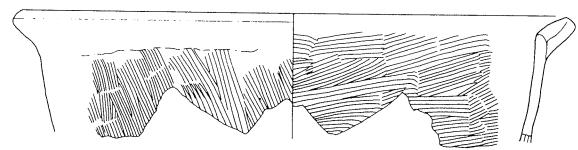
8住



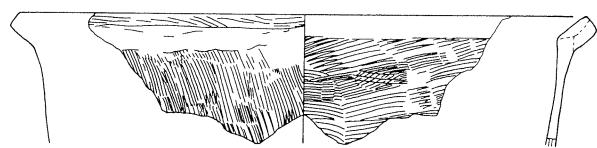
8住



13住

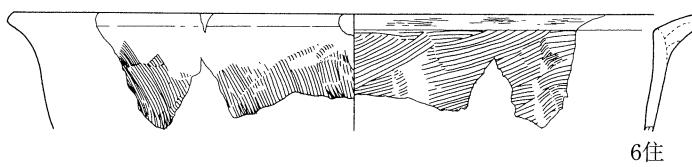


13住

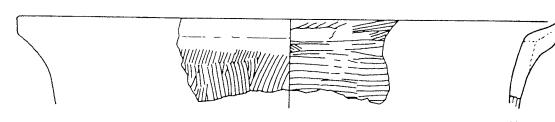


11住

第Ⅲ期群

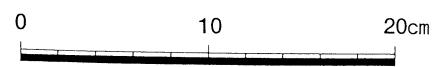


6住

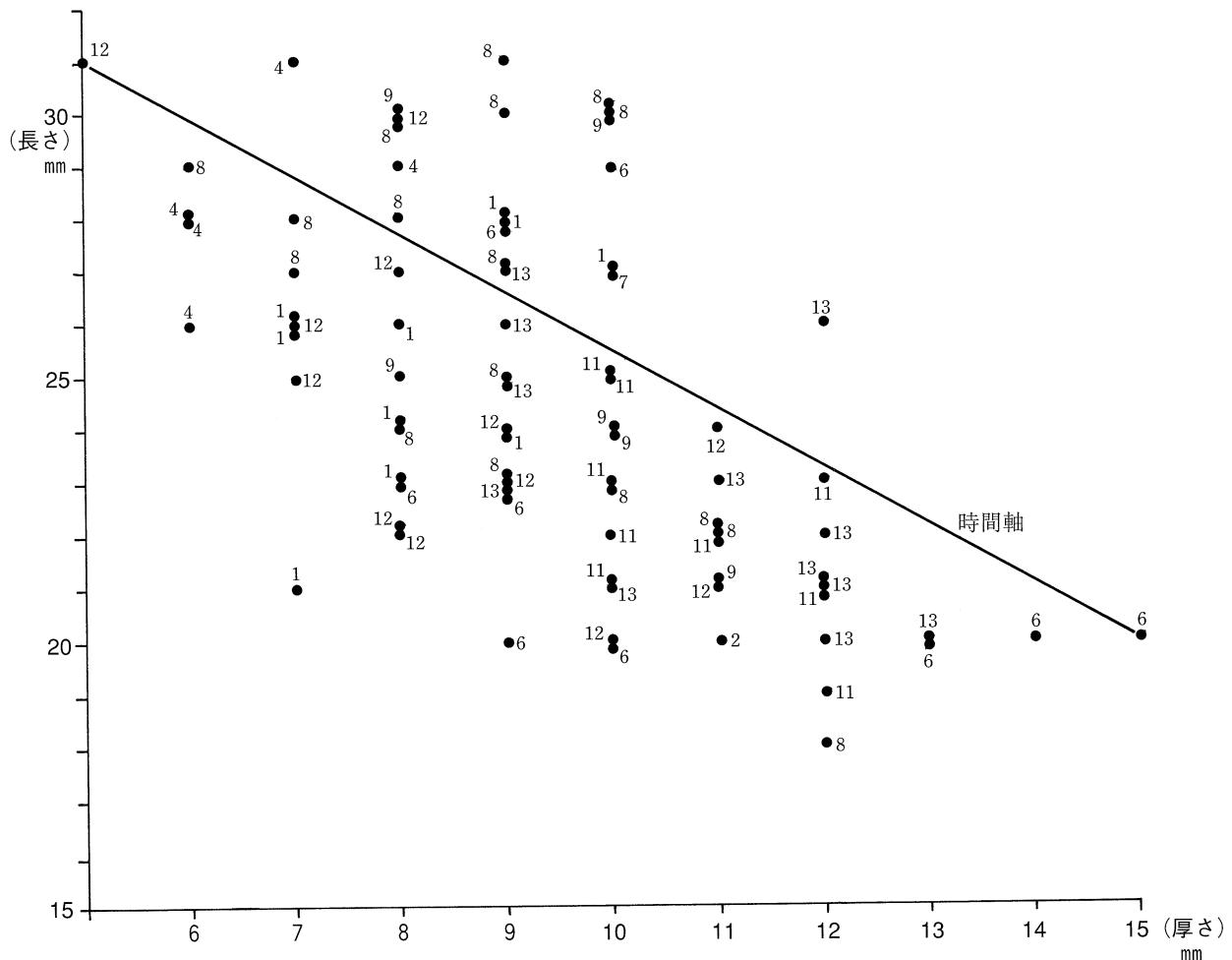


6住

第Ⅳ期群



第1図 東原遺跡出土の甲斐型甕

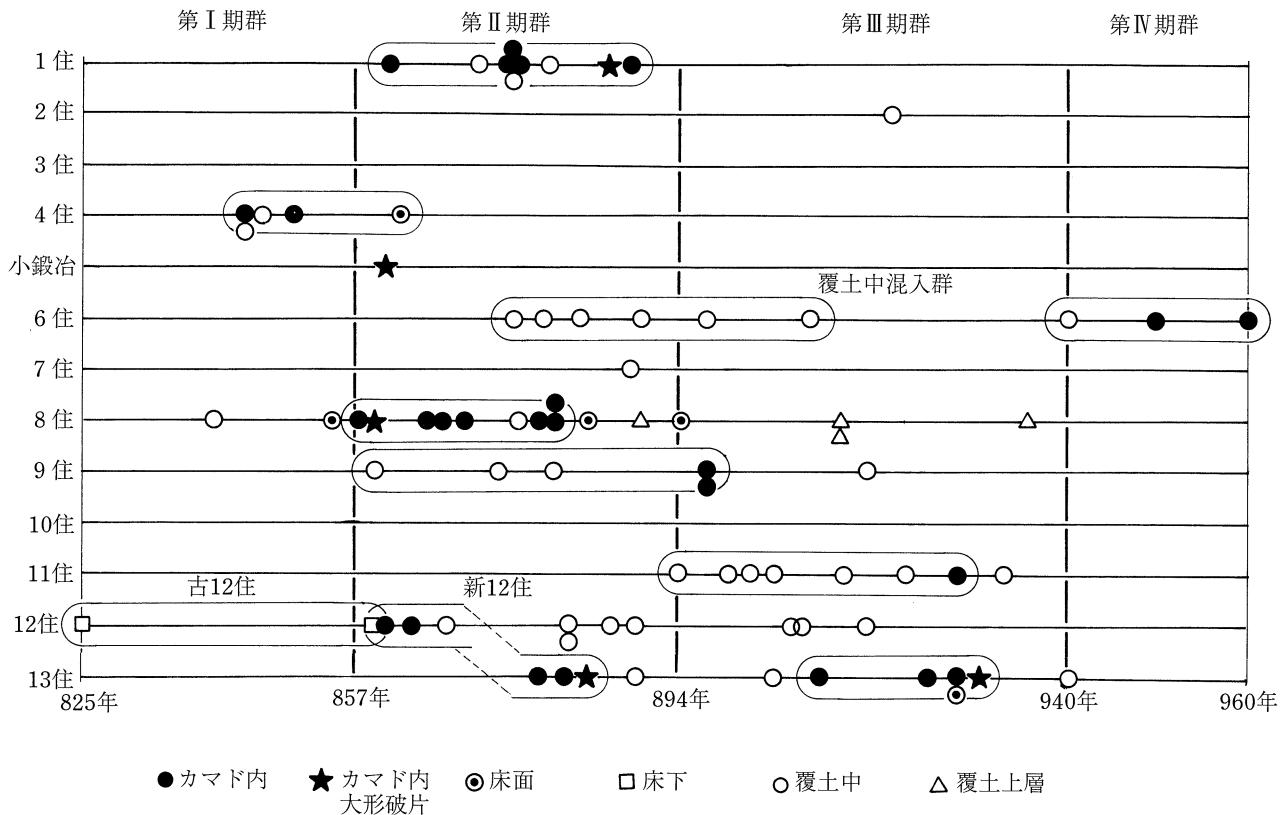


第2図 甲斐型甕の口縁長と厚さ

が示されており、ほぼ完成されている（註4）。特に壺を基軸とする編年であるが、VII期とVIII期の間では磨きの消失やみこみ部分の暗文の消失といった技術的要素の消失というイベントがあり、段階的把握が可能である。X期とXI期の間にも暗文の消失があり、XII期とXIII期の間には手持ちヘラ削りの消失というイベントがある。これを「段階的変化属性」と呼びたい。この他に、口径、底径、器高等などや、口縁部の形態変化、すなわち丸口縁から玉縁口縁、隆玉縁口縁への変化は連続的に切れ目なく変化するので「継続的変化属性」と呼ぶことができる。継続的変化属性は時期のかけはなれたもの同志では見分けが明瞭であるが、隣り合う時期のものではなかなか判断ができないものである。甲斐型土器の編年は両者を複合させて提示されており、段階的変化属性で定義された段階は区分が明瞭であるが、継続的変化属性で定義されているVII期とVIII期、VIII期とIX期、XI期とXII期の各時期の境界が見た目では不明瞭である。

集落を構成する住居址の継続期間を論議するには、継続的変化属性に着目する必要がある。継続的変化属性は数値化が可能であり、客観的表示が可能であるが、統計的に有意な成果を得るにはなるべく多くの資料を確保する必要がある。継続的変化属性の分析はいくつか試みられているが（註5）、集落論のためには破片でも計測可能な属性に着目する必要がある。そこで、今回は各住居址に比較的安定的に出土する甲斐型甕の口縁部に着目する。

甲斐型甕の口縁部は薄くて長いものから厚くて短いものへと継続的に変化すること（第1図）が指摘されている（註4a）。筆者はかつて、具体的な数値を示してその過程を検討したことがある（註6）。その折りはその変化は成形時の粘土紐の重ね方などの技術的变化が厚みや長さに現われているとし、段階的変化属性として捉えた



第3図 甲斐型土器の実年代変換グラフ

が、今回の検討から先学が指摘するとおり継続的変化属性であることを確認した。ここに前説を訂正したい。

また、甲斐型土器の編年研究では年代論がなされており（注7）、今回検討する継続的変化属性を実年代に変換することが可能である。

2 時間軸としての甲斐型甕口縁部の継続的変化

第2図は東原遺跡の甲斐型甕の口縁部の内側の長さと中央での厚さをグラフ化したものである。覆土中出土も含めて各住居址出土の土器片すべてをプロットしたものである。これには床面やカマド出土のものばかりでなく覆土中出土のものも含まれている。甲斐型甕の変化は薄口縁型から厚口縁型、末広口縁型と変化し（注6）、グラフ左上付近により古い形態である薄口縁型が分布し、中央部から右下付近に厚口縁型、右下端に末広口縁型が分布する。左上から右下への変化が時間の経過の方向と認定しうる。そこで、最も左上に位置する土器（12号住居址床面下出土、床面を剥がして粗掘りした部分を調査した折りに出土）と最も右下に位置する土器（6号住居址カマド内出土の末広口縁型）とを直線で結び、これを時間軸とする。この軸に各土器の点を垂直に投影し、その分布状況を見たのが第3図である。

この状況をみると、この時間軸に対し各住居址の甲斐型甕はあるまとまりをもって分布している。1号住居址では覆土中とカマド内の甲斐型甕が同様な範囲に分布し、カマド内の大型破片が最も新しい位置である右端部にある。4号住居址では床面出土の甲斐型甕が最も新しい位置にあり覆土とカマド内の甲斐型甕が一団となって分布する。6号住居址ではカマド内が覆土出土よりも新しい位置にあるが、覆土中のものが一団となりカマド内のものとは距離がある。この他の住居址ではカマド内出土の甲斐型甕を中心に左右の位置に分布が見られるが、9・11・13号住居址では覆土内の甲斐型甕がカマド内よりも古い位置に分布するものが圧倒的に多い。また、8号住居址ではカマド内的一群よりかなり離れて新しい位置にあるのは覆土上層出土のものであり、住居址の埋没過程で上層部に混入した可能性がある。8号住居址は最も新しい時期の甲斐型甕を出土している

号住居址に隣接しており、6号住居址の土器片を含む生活廃棄物が窪み状態の8号住居址に流れ込んだり、土器の破片を含む廃棄物が廃棄された可能性がある。同様に12号住居址は隣接する13号住居址のより新しい甲斐型甕の混入が考えられる。また、6号住居址は7・8・9号住居址周辺に廃棄されていた同住居址の住人の生活廃棄物が、6号住居址廃絶とともに覆土中に混入した可能性が考えられる。こうした、混入の考えられる甲斐型甕群（カマド内土器群より新しい位置にある覆土中出土のものと、カマド内出土より古い位置にあるがカマド内よりもかなり距離を置いて一団をなすもの）を継続期間検討材料から排除したい。

一方、13号住居址はカマド内出土甲斐型甕が新旧の時期に分かれて2群が存在し、いずれにも大型破片が存在している。13号住居址には12号住居址が隣接し、13号住居址の古いカマド内出土群は12号住居址のカマド内出土群と位置が近い。そこでこの現象については、13号住居址のカマド構築に際して、隣接する12号住居址のカマド内にあった大型土器片をカマド構築材として転用したものと解釈したい。したがって、13号住居址のカマド内の古い一群は12号住居址の継続期間を示す資料と考えたい。

各住居址覆土内の土器群は、その住居址の住人が生活活動の中で住居址周辺に廃棄した生活廃棄物が住居址廃絶とともに覆土中に混入したものと考えたい。特に11号住居址は集落内で最も高所にあり、周辺に隣接する住居址が見当らないことから、覆土中の古い甲斐型甕群についてこのように考えるしかない状況である。そこで、第3図に示す範囲を住居址の継続期間として提示したい。

3 実年代への変換

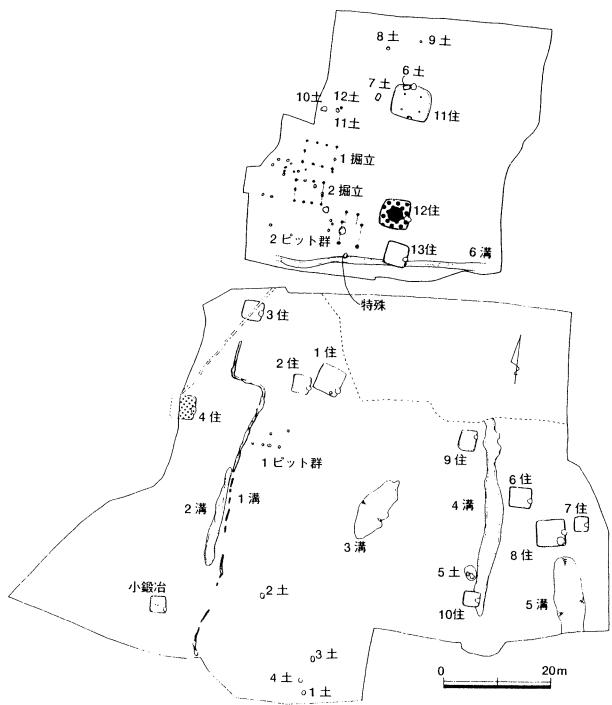
つぎに、これを実年代に変換する手法を提示する。東原遺跡では、甲斐型壺の検討から最古段階の土器が甲斐編年Ⅷ期であり、最新段階がXII期である。集落が形成されるⅧ期の絶対年代は、最近では瀬田正明氏の案（注7a）と櫛原功一氏の案（注7b）がある。両者は若干ずれがあるがⅧ期の開始時期については概ね9世紀第2四半期初頭、すなわち825年前後としている。そこで、第3図の左端部を825年と仮定したい。XII期の終了年代については両氏とも960年としており、第3図右端部を960年と仮定したい。すなわり、第2図は135年の期間を表すことになり、甲斐型甕が不断に継続変化したと仮定して第2図中の甲斐型甕の各点が絶対年代を示すこととなる。

こうして算出した各住居址の継続年代は、1号住居址が860～888年の28年間、2号住居址が918年、4号住居址が844～861年の17年間、小鍛冶遺構が860年、6号住居址が939～960年の21年間、7号住居址が888年、8号住居址が857～879年の22年間、9号住居址が859～897年の38年間、11号住居址が893～926年の33年間、12号住居址が860～883年の23年間、13号住居址が905～928年の23年間である。各住居址の継続期間は20～25年間が4軒と最も多く、最も短いものが17年、最も長いものが38年で、平均が25.6年である。当時の堅穴住居の耐久期間を考えるとやや長い印象を受けるが、各住居址が近似する数値を示しておりかなり信頼性が高いものと思われる。Ⅷ期の始まりからXII期の終わりまでを時間軸としており、両期の中盤から始まり終わるとすると、この期間は若干短くなるはずである。また、同一カ所での立て替え、修理を考える必要があるかもしれない。

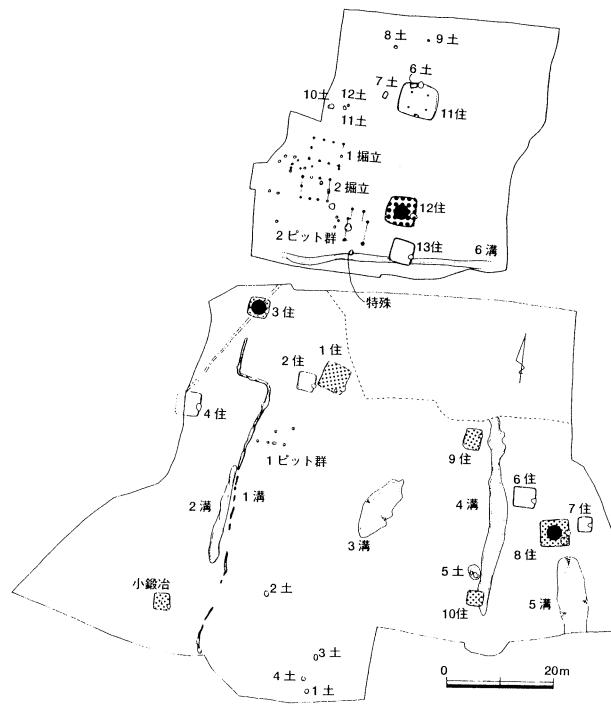
立て替えについては、12号住居址が可能性がある。この住居址は床面を剥がして粗掘り部分を調査したが、その床面下覆土内から出土した甲斐型甕が本遺跡最古の甲斐型甕の属性を示している。これは、発掘時に確認された12号住居址以前に前身住居址とも言うべき住居が重なっていて、それを取り壊した折りの土器片が床面下に埋め込まれた可能性がある。この住居址を古12号住居址とし床下出土甲斐型甕の分布範囲を継続期間としたい。

4 住居址群の出現画期と分布

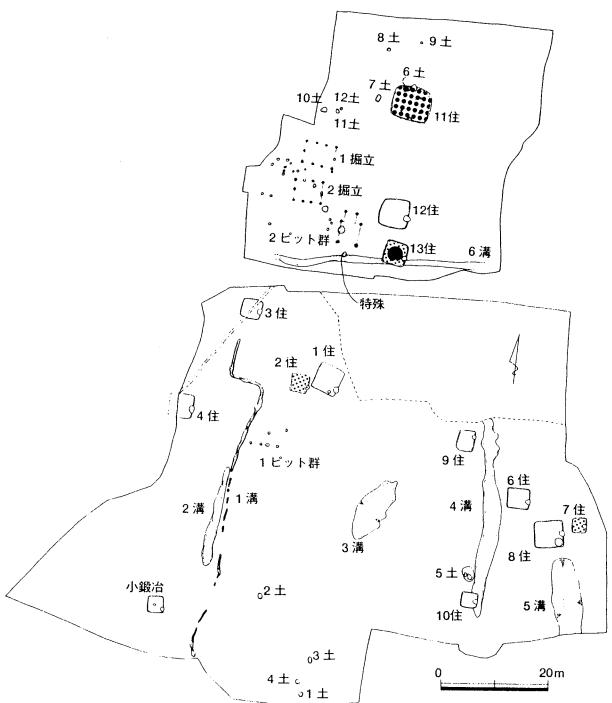
第3図をみると、各住居址の形成と廃絶の時期が近似する一群が存在することがわかる。まず、古12号住居址と4号住居址（第I期群）、この群の廃絶と前後して1・8・9・新12号住居址が形成される（第II期群）。この群の廃絶と前後して11・13号住居址が形成される（第III期群）。この群の廃絶後、6号住居址が形成される



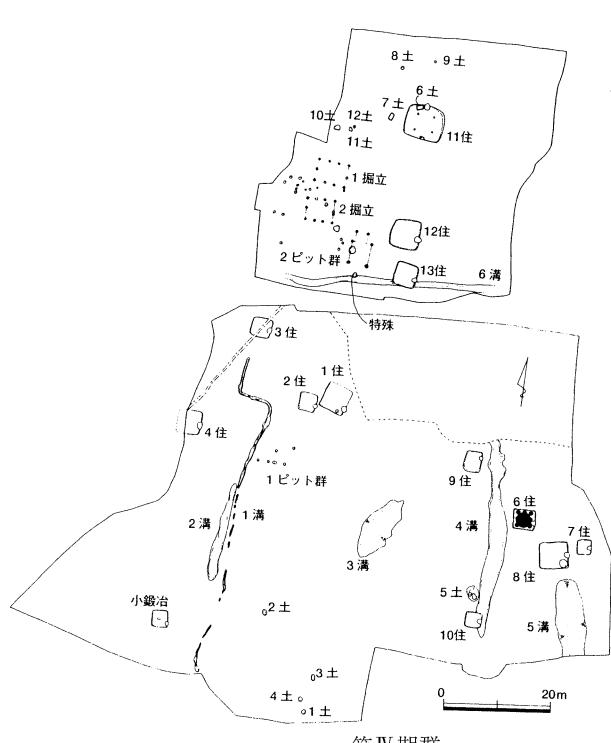
第Ⅰ期群



第Ⅱ期群



第Ⅲ期群



第Ⅳ期群

■ 繼続墨書出土住居址

■ 板礫敷設カマド住居址

■ 当該時期住居址

第4図 各時期群の住居址分布

(第Ⅳ期群)。この状況からすると、各住居址は形成と廃絶をほぼ同じくする4期の群に分けられるのである。そこで、継続期間の不明な住居址もこの時期群のいずれかに帰属するものしたい。なお、7号住居址は8号住居址に近接し、同時存在は考えがたい。また、灰釉陶器が出土しており、第Ⅲ期群以降の特徴である。そこで、7号住居址を第Ⅲ期群に位置付けたい。3号住居址は後述するカマドの分析から第Ⅱ期群か第Ⅲ期群(住居址配置から第Ⅱ期とする)、10号住居址はカマドの廃絶属性の特徴から第Ⅱ期群に帰属させることとする。

この状況を平面分布図上に示したのが第4図である。第Ⅰ期群は2軒、第Ⅱ期群が最も多く住居址6軒と小鍛冶遺構、第Ⅲ期群が4軒、第Ⅳ期群が1軒である。これらの分布の特徴をみると、住居址群が団塊状にかたまらず、20~30m程度の距離を置きながら分散分布する状況が見て取れる。住居址全体で見た場合、3~5軒からなる団塊状の部分が3ヵ所区分できるが、この団塊状部分で同時存在するのは最大3軒で、1軒の場合が最も多い。小鍛冶遺構がある地域はこの団塊状部分から離れているのであたかも集落の端に意図的に分離されているように見えるが、各時期ごとに見た場合は分散的な住居址分布の一部に組み入れられ、特異な分布位置を占めるという状況ではなくなるのである。ただし、最南端に位置するのは、冬期の北風の風下を意識しての位置付けの可能性もある。そうすると、この団塊状の分布域は何を意味しているかが問題となる。この点を含めて、次に各住居址の集団表象に関する属性分析に進みたい。

5 集団表象分析の対象としてのカマド属性と墨書き土器

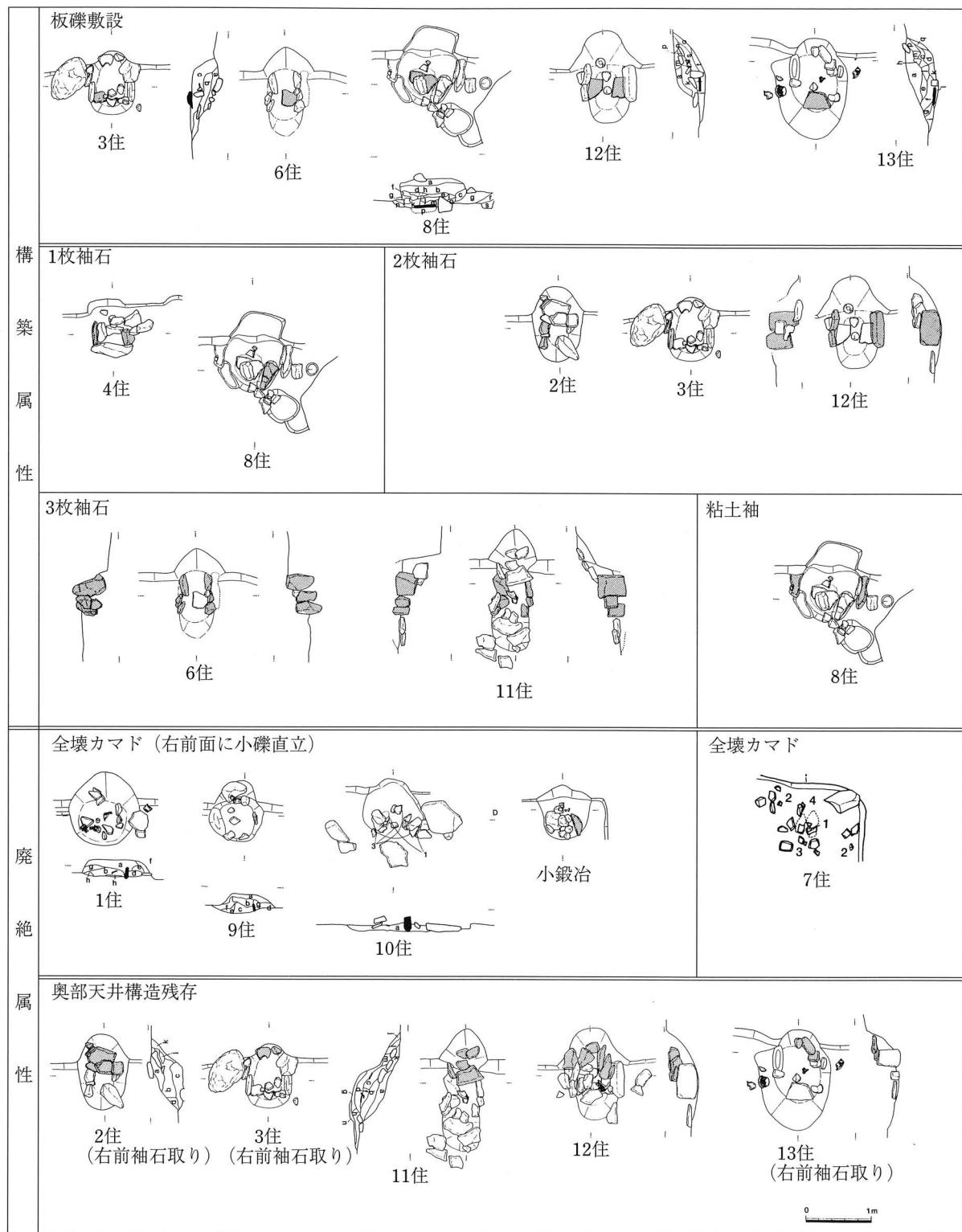
集団表象についてはこれを土器や石器の型式に見いだそうとする試みがなされている。平安時代の土器型式は、それがある生産体制のもとにある流通圈を対象に一括生産されている可能性が指摘されている。甲斐型甕も甲府盆地中央部などでの一元的生産が推定されている。したがって、その型式は生産工房の生産集団の型式であり、その生産と流通の体制を表象することになる。各集落での住居址相互の集団表象を論議するには資料とすることができないものである。各住居址の住人の集団表象が現われるとすると、各住人が構築する住居址、カマド、土器に書かれる墨書きなどが候補となる。そこでここでは属性が多様なカマドと墨書き土器に着目する。

第5図はカマドを分類したものであるが、カマドの特徴は構築状況での属性と、廃絶行為に関する属性とに分けられる。まず構築属性では袖石の数、燃焼部への板状礫の敷設に着目したい。袖石の数は1枚から3枚が見られる。1枚は4・8号住居址で第Ⅰ・Ⅱ期群、2枚が2・3・12号住居址で第Ⅱ・Ⅲ期群、3枚が6・11号住居址で第Ⅲ・Ⅳ期群である。この属性は時期変化しており、時期変化属性とすることができる。板状礫敷設は3・6・8・12・13号住居址にあり、第Ⅱ~Ⅳ期群まであり、新12号住居が古12号住居の立て替えなので、古12号住居址にもあった可能性を認めると第Ⅰ~Ⅳ期群のすべての時期に1~2軒ずつ存在していたことになる。この属性をこの集落の継承属性と呼ぶ。集団表象が示されるとすると、この継承属性である可能性がある。なお、他のいくつかの八ヶ岳山麓の平安集落のカマドを報告書により観察したが、板状礫敷設の例はほとんど見られず、本遺跡の特徴とすることができる。

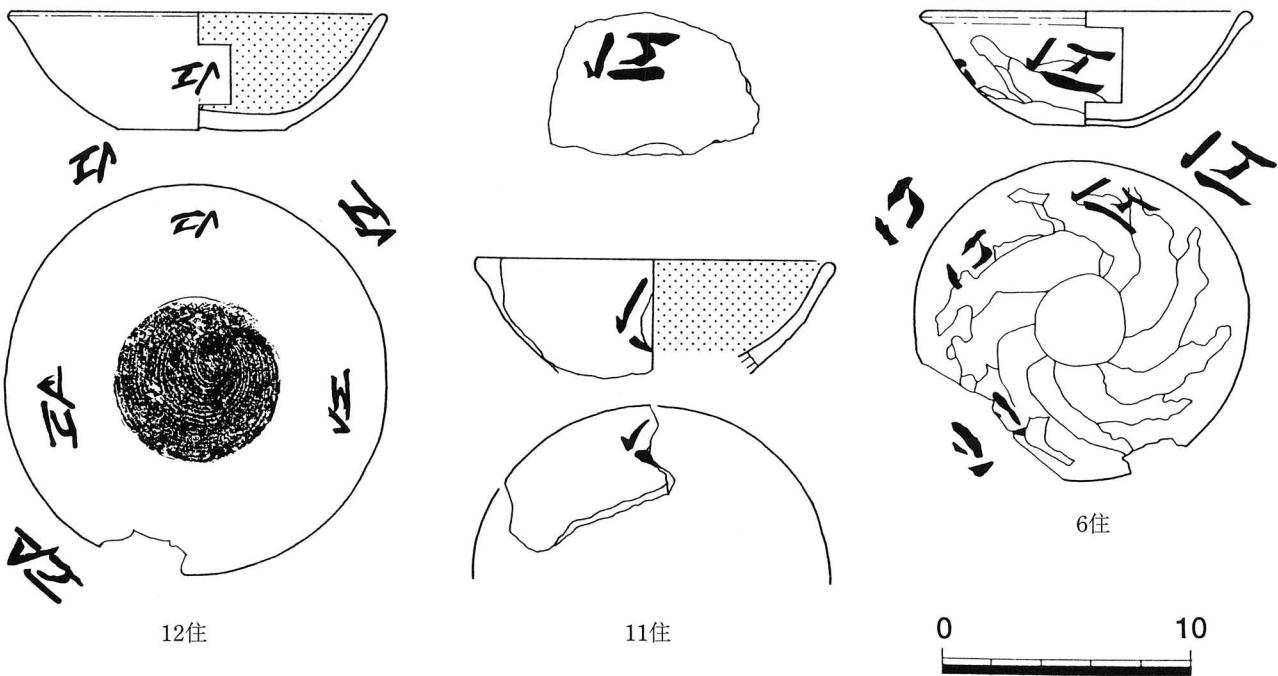
ただし、8号住居址は両袖石と壁との間に粘土を入れて袖を構築しており、特徴的である。また、燃焼部と煙道部との間に段差があり、他のカマドにはない特徴をいくつもっている点に注意を要する。

廃絶属性については、構築材の大半を取り崩した全壊カマドがまずあげられる。1・7・9・10号住居址、小鍛冶遺構で7号住居址が第Ⅲ期群である以外はすべて第Ⅱ期群である。ただし、このなかにカマドに向かって右前面に1個の小礫を直立した状態で残したもののが4軒見られる。1・9・10号住居址と小鍛冶遺構でありこの3者は同一の集団表象を共有しているとすると、この属性も集団表象を示す可能性があるが、この集団は第Ⅲ期以降この集落へは留まらず他集落へ移動していく状況がうかがえる。

この他の廃絶属性ではカマド奥部の天井の構造を残したものがある。2・3・11・12・13号住居址で第Ⅱ・Ⅲ期群である。また、カマドに向かって右前の袖石を取りのぞいた廃絶状況を示すカマドがある。2・3・13号住居址でやはり第Ⅱ・Ⅲ期である。この内3・12・13号住居址は板状礫敷設の継承属性が共通しており、集団



第5図 カマドの構築属性と廃絶属性



第6図 繼続的に使用された墨書

表象を共有している可能性を強化している。

次に、墨書土器であるが、複数の住居址に分布する同一の字体の墨書がある。江の字に似た字であるが判読できない文字である（第6図）。これは6・11・12号住居址に分布する。古12号住居址をこれに含めるとすると、第I期群から第IV期群まですべての時期に1軒ずつこの文字をもつ住居址が存在することになる。これは継承属性であり、まさにこの集落の集団表象とことができる。しかも、6・12号住居址はカマドに板礫敷設する継承属性をもっており、おそらく血縁集団の継続居住が指摘できる資料である。

6 東原遺跡の平安時代集落の構造

これまでの検討から、本遺跡の継続したと考えられる135年間に変化せずに引き継がれている集団表象の存在が知られた。それは、カマドの板礫敷設構造と江の字に似た墨書である。その集団は第I期段階に集落の北に居を構え、ある時期から合流するもう1軒の住居と2軒で集落を構成する。2軒の住居址、おそらく非血縁の2つの集団は約20年間の共同生活の後、古12号住居址の集団は同一場所に新12号住居址を立て替えて、継続的に居住する。4号住居址の集団は、集団表象を引き継ぐ集団でないことから、他の集落へ移動していったと思われる。

これらの動きと合い前後して、1・9・10号住居址と小鍛冶遺構からなる一群の集団（カマド廃絶属性が共通）が到来する。また3・8号住居址が出現し、新12号住居址の集団に合流し集落を形成するが、3・8号住居址は新12号住居址と同様に板礫敷設構造のカマドを共有しカマド廃絶行為も近似することから、新12号住居址の集団と血縁関係を持つなど同一の集団表象を共有する集団と思われる。古12号住居址と同一家族すなわちその子供が分居したのか、古12号住居址の集団の故地の血縁集団が到来したものと考えたい。一方、1・9・10号住居址と小鍛冶遺構の集団はこれらとは非血縁集団であったと思われる。この集団は鉄器の生産に関する集団と考えられる。小鍛冶遺構を構築するにあたり、集落の最も南の最も低い位置に占居し、冬期の北風で小鍛冶活動の火が他の住居に延焼しないようにとの配慮と思われる。1・9・10号住居址と小鍛冶遺構の集団、8号住居址の集団は、本遺跡に継続属性が見られないことから、40年弱の間に、他の集落へ移動していったもの

と思われる。

一方、新12号住居址の集団は11号住居址へと転居して江の字の墨書を引き継ぎ、3号住居址は13号住居址に転居して板礫敷設のカマド構造を引き継ぐ。この時期、2・7号の2軒の住居址の集団が合流するが、11・13号住居址の集団とは集団表象を異にしており、非血縁集団と思われる。70年弱の間に2・13号住居址の集団は他の集落へと移動し、11号住居址の集団は6号住居址に転居して江の字の墨書と板礫敷設構造のカマドを引き継ぐ。約20年間の居住の後、6号住居址の集団は他の集落へと移動し、東原遺跡の平安集落は断絶する。

東原遺跡に居住する集団は、板礫敷設カマド構造と江の字の墨書を135年間にわたって引き継いでゆく継続的居住集団と、ある時期にのみこの集落に合流する遊動的集団とが存在することが理解できる。遊動的集団の内、継続的居住集団とカマド構造や廃絶行為での集団表象を共有するものの、集落継続期間のある時期に合流ないしは分居し、また移動してゆく継続的居住集団と血縁関係などをもつ遊動的集団が存在する。継続的居住集団とはまったく別の集団表象をもつあるまとまりをもつ集団で、複数の住居址で構成される団塊的な遊動的集団がある。この集団に小鍛冶集団が含まれる。逆に小鍛冶集団は団塊的な集団構造をもつ遊動的集団である可能性がある。また、まったく個々に合流し、移動してゆく継続的居住集団等と血縁関係などをもたない単独的な遊動集団も存在する。

ところで各時期の住居址の大きさを見ると、各時期とも北に位置する住居址が最も大型で南にのものが小型であることに気付く。第Ⅱ段階の1・9・10号住居址と小鍛冶遺構からなる団塊的な遊動的集団も同様な構造をもっている。ほぼ南北方向に北から大・中・小、ないしは大・小と配列する構造をもっていた可能性がある。

もうひとつ、最初に指摘した住居址の団塊分布地域については、最北部については継続的居住集団に占居されており、また掘立柱建物址なども分布することから、一定の広がりが切り開かれた裸地であったと思われる。同様に、ある時期に切り開かれた一定の広がりをもつ裸地があり、そこにつぎつぎと遊動的集団が移動してきて占居したりするのではないだろうか。逆に、その裸地の周りは奥深い森林であったとも考えられる。それ故に、既存の裸地に団塊状に脈絡のない住居址が集中する現象が出現するのではないだろうか。

注1 萩原三雄 1986「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会など

注2 米田明訓・河西学 1986『柳坪遺跡』山梨県教育委員会

平野 修 1992「宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の集落様相」『宮ノ前遺跡』韮崎市遺跡調査会ほかなど

注3 山梨県教育委員会 1998『東原遺跡』

注4 a 坂本美夫・末木健・堀内真1983「甲斐地域」『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古同人会

b 山梨県考古学協会編 1992『甲斐型土器—その編年と年代』

注5 坂本（菊島）美夫 1975「山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論」『甲斐考古』11の1など

注6 保坂康夫 1989「古代の甲斐型甕をめぐって」『甲斐の成立と地方的展開』角川書店

注7 a 瀬田正明 1992「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器—その編年と年代—』山梨県考古学協会

b 櫛原功一 1992「宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡』韮崎市遺跡調査会ほか